

2010年(平成22年)12月15日(水曜日)

出雲大社 摂社の檜皮再利用

天井に木炭を敷き詰める作業を見守る小林院長(手前、出雲市の大付属病院で)



島根大病院新病棟

木炭に加工、調湿や防臭

摂社は、本殿の隣の天井に木炭を敷き詰めることを決定。天前社の祭神は「蛭貝比売命」といわれ、やけどを負った大国主命を治療したと古事記に登場することから、看護にかかる神とされている。

「平成の大遷宮」の一環で、天前社でも60年前に屋根にふかれた檜皮がばがされたが、「再活用しよう」と、出雲大社が須勢理比売命を祭る摂社・御向社の檜皮と合わせて木炭にしていた。一方、来年6月の完成を目指して新病棟を建設している同病院は、防カビや調湿、防臭などの効果があることから、緩和ケアなどに使用する特別個室などを新設することを決意。天前社のことを知った小林祥泰院長が、出雲大社に檜皮の提供を依頼した。出雲大社も快諾し、チップ状の木炭が詰まつた袋(1袋15kg入り)3130袋を贈呈した。この日、出雲大社で小林院長と同大学の山本広基学長が、千家尊祐宮司から木炭を受け取り、感謝状を贈呈。木炭は早速、新病棟に運ばれ、作業員たちが次々と天井に上げていった。小林院長は「病気の治療は患者の精神的な要素も大きい。看護の神様のものとく元気になる役に立つのでは、うれしい」と話している。

「看護の神様」病室天井に

出雲大社(出雲市大社町)の摂社の屋根を覆っていた檜皮を再利用した木炭が、島根大医学部付属病院(同市塩冶町)の新病棟で、病室の防カビや調湿のために使用される。同病院が14日、出雲大社から譲り受け、病室の天井に敷き詰める作業を開始。摂社の祭神は「看護の神」として知られており、同病院は「精神的な癒やしの効果もあるはず」と「パワー」に期待している。

根に入り)3130袋を贈呈した。この日、出雲大社で小林院長と同大学の山本広基学長が、千家尊祐宮司から木炭を受け取り、感謝状を贈呈。木炭は早速、新病棟に運ばれ、作業員たちが次々と天井に上げていった。小林院長は「病気の治療は患者の精神的な要素も大きい。看護の神様のものとく元気になる役に立つのでは、うれしい」と話している。